

コミュニケーションと音楽に関する研究のこれまでとこれから

—わが国と英国に焦点を当てて—

武島千明

(広島大学大学院人間社会科学研究科博士課程後期)

Connecting Music and Communication: Focusing on Research Developments in Japan and the UK

Chiaki TAKESHIMA

Abstract

In recent years, the perception of music as a form of human communication has spread to various music-related research fields. Research based on this perception is flourishing in the UK. Among these, “Communicative Musicality” proposed by Malloch and Trevarthen (2009) in particular has significantly attracted Japanese music education researchers’ attention and has been referred to in their research extensively. This paper aims to summarize these research trends in the UK and identify the challenges and prospects for this research in Japan. Consequently, in addition to quantitative research based on “Communicative Musicality,” models such as the “Reciprocal Feedback Model of Musical communication” by Hargreaves et al. (2005) as an analytical framework for qualitative research can be utilized for research development in Japan.

1 研究の目的と背景

現在、音楽を人間のコミュニケーションのひとつのかたちとしてとらえる認識が、音楽にかかわる様々な分野の研究において広がっている。特に近年では、音楽文化人類学や音楽心理学などの研究知見を参考にし、音楽教育研究の分野でもこのような認識に立った研究が進められるようになってきている。このような認識に立ち、音楽にかかわる様々な研究が盛んになされている国のひとつが、英国である。セミナーの開催や論文の発表、著作の出版など、精力的に研究成果の発信がなされており、その研究の成果は、音楽に関する研究を行う世界各国の研究者に参照されている。

わが国においても、英国における研究から得られた知見に関心が寄せられている。特に、音楽教育研究の分野においては、英国での研究成果が紹介されたことを契機に、ここ5年ほどの間で、音楽を人間のコミュニケーションのひとつのかたちとしてとらえる認識が学界に位置づけられてきた。紹介されたのは、スティーヴン・マロック (Stephen Malloch) とコルウィン・トレヴァーセン (Colwyn Trevarthen) の提唱した「コミュニケーション・ミュージカリティ (Communicative Musicality)」(Malloch & Trevarthen 2009) である。このアイデアに関して、詳細は後述するが、「人が本来的にもつ能力を基盤とした『人一人』の間主観の関係性の中に、動的に発現するものとして音楽性を捉える」(今川ほか 2018, p.125) コミュニカティヴ・ミュージカリティは、「人はなぜ、なんのために音楽をするのか」という問い(今川ほか 2018, p.126) に応え得るアイデアとして、日本の研究者の関心を集めることとなった。

しかし、現在のわが国で「人はなぜ、なんのために音楽をするのか」という問いのもと広まってきたコミュニケーション・ミュージカリティは、英国では異なる文脈により必要とされ、発展してきたはずである。それにも関わらず、わが国ではコミュニケーション・ミュージカリティの概念そのものが注目されても、そ

の文脈に目を向けられることはなかった。これから、わが国の文脈でコミュニケーション・ミュージカルリティをはじめ、コミュニケーションと音楽に関する議論を進めていくためには、英国でコミュニケーションと音楽に関する研究が辿ってきた文脈を理解することが必要なのではないだろうか。

そこで、本稿では、英国におけるコミュニケーションと音楽に関する研究の系譜の概要を見とる。英国においてコミュニケーションと音楽に関する研究が発展した経緯を、わが国の状況と照らすことで、わが国におけるコミュニケーションと音楽に関する研究が抱える課題と展望を明らかにすることを、目的とする。

2 ブラックングによる提案とその余波

英国において、音楽を人間のコミュニケーションのひとつのかたちとしてとらえる認識に立つ研究を先進的に行った、民族音楽学研究者のジョン・ブラックング (John Blacking) が与えた影響は大きい。例えば、彼の論考である “The Value of Music in Human Experience” は、社会における個人の経験と音楽との関連性を示唆するのみならず、「音楽はヒトのコミュニケーションのひとつのかたちである」というアイデア (Blacking 1969/1995, p.31) を提案するなど、当時としては革新的なアイデアを英国の研究者にもたらした。さらに、彼は、*How Musical is Man?* という著書のなかで、これまでの音楽に関する研究の主流であり、テストを用いて音楽的な能力を測ることで音楽性の本質を明らかにしようとしてきた音楽心理学のあり方に対して多くの問いを投げかけた。ブラックングのもつ問題意識は、書籍の題する「ヒトはいかに音楽的か？」に集約される。彼は、ある社会において、どのようなものが「音楽的」とされるかは、その社会において、どのような音響とどのような種類の行動が「音楽的」とされるのか、に拠ると考えている (Blacking 1979, pp.4-5)。この考えにもとづき、ブラックングは西洋音楽 (自民族) の価値観で音楽性を判断していた音楽心理学研究のみでは明らかにされ得ない、ヒトが本来的にもつ音楽性を明らかにするための研究を行った。西洋音楽とは異なる音楽文化をもつアフリカ・北トランスヴァールのヴェンダ (Venda) の人々の音楽的な営みを記述・分析したこの研究は、西洋音楽にもとづく「音楽的な能力」のテストによって担われてきた音楽心理学研究のあり方を明確に批判し¹⁾、民族音楽学的なアプローチをもって、ヒトが生得的にもつ音楽性がどのようなものであるかを明らかにしようとしたのである。

ブラックングによる問題提起などを背景に、音楽心理学は岐路に立たされた。本稿では、ここで音楽心理学にとって重要なはたらきを行った人物として、冒頭でも挙げたコミュニケーション・ミュージカルリティを提唱したコルウィン・トレヴァーセンと、音楽心理学の新しい体系を模索してきたデイヴィッド・ハーグリーヴズ (David Hargreaves) を挙げる。彼らは、同じく心理学を背景にもつ研究者ではあったものの、異なるアプローチで音楽心理学の抱える問題に真向かった。

1982年、トレヴァーセンは、ブラックングとともに「乳幼児の音楽性」というセミナーを開催し、彼と直接議論を交わした。ブラックングとトレヴァーセンの意見が分かれたのは、赤ちゃんと母親のやり取りに関するとらえだった。ブラックングは赤ちゃんが母親に反応する要因を、学習された音響に対する反応としてとらえていた (Blacking 1988, p.108) のに対し、トレヴァーセンは、赤ちゃんが間主観的な動因を有しているためだと考えていた (Trevvarthen 2002, p.23)。この後、トレヴァーセンは、音響分析を用いた自身の研究によって、赤ちゃんが生得的に間主観性を有していることを実証することとなり (Trevvarthen 1984)、ヒトの発達の初期にあたる乳児期を対象に、音楽心理学の知見を深めていった。

一方、ハーグリーヴズは、ブラックングによる批判の対象となった音楽心理学と発達心理学 (Hargreaves 1986a) や社会心理学 (Hargreaves & North 1997) を融合させることによって、これまでの音楽心理学が抱えていた課題を乗り越えようとした。詳細は後述するが、彼の提案した音楽発達心理学は、学際性と現実の問題への適用性を秘めているという点で、これまでの音楽心理学とは幾分か異なる点を有する学問だと主張した (Hargreaves & Lamont 2017, pp.7-8)。彼は、自身の研究活動によって、その新しい学問の特徴を体現してきた。例えば、音楽発達心理学が「現実の問題への適用」にかかわりが深い²⁾ 理由である音楽教育研究・実践との結びつきと関連して、ハーグリーヴズ自身も音楽教育研究に携わっている³⁾。また彼は、ブラックングの指摘をふまえて西洋音楽を媒介変数として扱う音楽心理学研究そのものへの限界に関してふれつつ (Hargreaves & Lamont 2017, pp.7-8)、それならば、クラシックに限らず現代の人々が聴取し

ているすべての音楽が研究対象となるべきだと考えている (Hargreaves & Lamont 2017, p.29)。このような「音楽」に対する決して狭義ではない彼のとらえは、音楽発達心理学、ひいては音楽心理学全体の研究対象の広がりにも貢献し、分野全体の発展にも大きな影響を与えている。

英国において、音楽に関する研究が岐路に立った 1980 年代以降、トレヴァーセンとハーグリーヴズは、それまで研究の中核を担ってきた音楽心理学に新たな風をとり込み、現在まで学界を牽引している。ここでは、彼らの研究の概要を紹介するにとどまっているため、これらをふまえて次節以降は、彼らが具体的にどのような研究成果や功績をあげ、わが国の研究に、どのようなかたちで影響を与えたのかを見ていく。

3 トレヴァーセンとマロックによる概念的アプローチ：コミュニケーション・ミュージカルティ

英国において、音楽を人間のコミュニケーションのひとつのかたちとしてとらえる認識に立つ研究者のうち、中心的な人物の一人が発達心理学研究者のクルウィン・トレヴァーセンである。トレヴァーセンは、現在、エディンバラ大学の児童心理学および精神生物学分野の名誉教授の職に就いている。彼の研究者としてのキャリアは、意識の脳システムと運動を支える視覚調整に関する研究でカリフォルニア工科大学の精神生物学の博士号取得から始まった。その後、ハーバード大学認知研究センターでジェローム・ブルナー (Jerome Bruner) に師事していた際より、乳児研究を開始し、文化学習への生来的動機や自閉症などの障害や鬱病の影響について研究している⁴⁾。そして、彼が音楽に関連して挙げた最も大きな業績のひとつに、冒頭でも紹介したコミュニケーション・ミュージカルティの提唱がある。

1979 年、彼は、のちにコミュニケーション・ミュージカルティのアイディアのきっかけとなる、赤ちゃんとのやり取りの音響分析に着手した (Malloch & Trevarthen 2009, p.2)。彼はその結果を、赤ちゃんの生得的な間主観性の実証という観点でまとめ (Trevarthen 2002)、母子間でなされる非言語的なコミュニケーションに注目が寄せられていた当時の潮流に乗った。

そのおよそ 20 年後、このデータの分析は、トレヴァーセンのもとで研究を始めたスティーヴン・マロックによって引き継がれ、さらに深められる。マロックは、自身の開発したソフトウェア (Malloch et al. 1997) を用い、2 年間にわたってデータの再分析を行った (Trevarthen 2002, p.24)。この結果をもとに提唱されたのが、「コミュニケーション・ミュージカルティ」である。トレヴァーセンの分析を深めることで、母子間のやりとりで見られる「パルス」の規則性、声の「クオリティ」、「ナラティブ」⁵⁾ に特徴が見られることを明らかにしたマロックは、人間にとって親しみやすいコミュニケーションのわざ (art) であり、生まれながらにして備わっている、他者と共感し合うための力 (ability) としてコミュニケーション・ミュージカルティを説明した (Malloch 1999)。

その後も、トレヴァーセンとマロックは、コミュニケーション・ミュージカルティに限らず、多様な視点から母子間のやり取りに関する研究⁶⁾を継続しているほか、音楽性と癒しの関係を探るなかで音楽療法へも関心を広げている⁷⁾。加えて、コミュニケーション・ミュージカルティに関する記念碑的著作として、*Communicative Musicality: Exploring the Basis of Human* (Malloch & Trevarthen 2009) を出版した。コミュニケーション・ミュージカルティをキーコンセプトに、多様な学問的背景をもつ研究者によって執筆された書籍の出版は、心理学にとどまらない、学際的なアイディアとしてコミュニケーション・ミュージカルティを学界に位置づけた。さらに、執筆者が、英国のみならず、欧州諸国、米国、オーストラリアなど、多様な国の研究機関に所属していたこともあり、これまで以上に世界的な発信力を得たコミュニケーション・ミュージカルティは、グローバルな注目を集めることとなった。

4 ハーグリーヴズによる方法論的アプローチ：音楽発達心理学と音楽の社会心理学

発達心理学者であるデイヴィッド・ハーグリーヴズは、現在、ロンドンのローハンプトン大学で教育学の教授の職に就いている⁸⁾。彼はスウェーデンのイエーテボリ大学の音楽教育研究所に長年勤務し、名誉博士号を取得するなど、音楽教育への造詣も深く、さらには BBC テレビと同ラジオのジャズピアニスト、地元の教会のオルガニストとして、演奏活動にも精力的に取り組んでいる。さらに彼は、心理学、教育学、

芸術に関する著作を数多く残しており、14もの言語に翻訳され、読まれている (Miell et al. 2007, p.xiii)。

第2節でも言及したとおり、ハーグリーヴズの業績のなかで最も影響力の大きかったもののひとつは、「音楽発達心理学」という新しい研究領域の可能性を開拓したことである。彼がこの研究課題に着手したのは、1983年にフロリダ州立の音楽教育センターで研究休暇を取得しているときであった (Hargreaves 1986a, p.ix)。このころは、*Music Perception* や *Psychomusicology* など、新たに公刊された学術雑誌をとおして、音楽心理学分野の研究が蓄積される状況にあり (Hargreaves 1986a, p.2)、ハーグリーヴズ自身もこれを「望ましい状況」としてとらえていた (Hargreaves 1986a, p.4)。しかし、その一方、特に英国において、芸術系の教科、特に音楽におけるカリキュラムを支える発達理論が少ないことをもとに、理論面を担う音楽心理学研究と実践面を担う教育的な研究の関係がいびつなカタチになっていることへの課題意識をもっていた (Hargreaves 1986a, pp.2-3)。このような状況に、音楽心理学がより応答するために提案されたのが、音楽発達心理学である。その概説書として位置づけられた *The Developmental Psychology of Music* では、はじめにハーグリーヴズによる音楽発達心理学という学問分野の構想が説明されたのち、子どもから成人まで、全生涯にわたる発達に関する広範なアプローチの概要がまとめられている (これは、彼が「発達心理学」を、「児童心理学」のような子どもを対象とした研究分野とは異なり、生涯 (Life-span) を対象とした研究を行うものとして認識していたこと (Hargreaves 1986a, p.1) を強く反映した構成である)。この書籍の最終章をハーグリーヴズは、「音楽教育が発達心理学に確固たる基礎をもたなければならない」 (Hargreaves 1986a, p.226) とまとめている。彼は、「音楽教育」の扱う範囲に音楽心理学や音楽療法を含んでいる米国の状況を例に挙げ、英国の音楽教育の抱える課題を乗り越えるためには、発達心理学の理論を用いて、理論と実践の往還のスタートラインに立つことの重要性を主張したのだった。

ハーグリーヴズが、音楽心理学のいち領域として「音楽発達心理学」を提案してから10年ほど経つと、音楽発達心理学を含め、音楽心理学がますます勢いのある研究分野となった。しかし、それと同時に、「音楽」という対象も、テクノロジーの進歩によって大きな広がりを見せ、人々の日常生活に密着したものとなった。さらに、心理学のほかの領域において、社会や文化の背景への着目がなされるようになった一方、音楽心理学にはこのような動きは見られなかった (Hargreaves & North 1997, p.v, pp.1-3)。このような課題意識のもとに、ハーグリーヴズが次に取りかかったのは、「音楽の社会心理学」への再注目である。彼は、米国の音楽心理学研究者ポール・ファーンズワース (Paul Farnsworth 1899-1978) の *The Social Psychology of Music* の出版を機に、音楽心理学の領域のひとつとして位置づいていた音楽の社会心理学に着目した。このハーグリーヴズの試みは、音楽行動の生物学的、物理学的な基礎が重要であることを過剰に評価し、音楽行動の文化面の決定要因をほとんど無視する傾向にある従前の研究者に対してファーンズワースが抱いていた課題意識を、現在の問題と重ね合わせることで、1990年代後半の音楽心理学の、社会的・文化的背景への着目が不足した状況を打開しようとしたものであった。

音楽発達心理学という学問領域の提案、音楽の社会心理学への再注目によってハーグリーヴズが目指したものの具体は、彼自身の研究によって示されていった。例えば、音楽のもつ社会的・文化的背景にも目を向けた音楽心理学研究として、*Musical Communication* (Miell et al. 2007) に関するものがある。特に、本書の第1章で提案されている「音楽的コミュニケーションの相互作用フィードバックモデル (Reciprocal feedback model of musical communication)」 (Hargreaves et al. 2007, p.18) は、そのなかに「状況と文脈 (Situations and contexts)」という項目を含んでおり、音楽的コミュニケーションを見とる場合には、音楽的反応と演奏の相互関係の間に存在する社会的・文化的背景が考慮されることが見とれる。さらに、Hargreaves (1986a) を下地に執筆された *The Psychology of Musical Development* では、1冊をとおして生涯的な発達を描いてきた前書から一歩進んで、各章がすべての発達段階に当てはまるようなトピックを扱い、音楽発達心理学研究の現在を描いている。また、第4章には“Social Development”というテーマのもと、社会文化的アプローチ、生態学的アプローチ、社会認知的アプローチをとった研究や諸理論がまとめられており、音楽発達心理学、音楽の社会心理学という領域の枠を超え、それらの知見を統合的に見とっている。彼は自ら、音楽心理学の新たな体系を醸成しているのだ。

5 わが国におけるコミュニケーションと音楽に関する研究の受容と展開

本稿の冒頭でも述べたとおり、現在、わが国ではコミュニケーション・ミュージカルティに関する音楽教育研究が盛んになされている。しかし、マロックによってコミュニケーション・ミュージカルティのアイデアが提案された2000年代前半、わが国における注目度は現在ほど高くなく、コミュニケーションを研究する一部の人々によって引用されるにとどまっていた⁹⁾。その後、わが国の研究者たちの関心を引くこととなる契機となったのが、*Communicative Musicality: Exploring the Basis of Human* の出版である。わが国において、このアイデアの意義を認め、日本の学界に精力的に広めたのは、音楽教育研究者の今川恭子と発達心理学研究者の根ヶ山光一らの研究グループである。かれらは、*Communicative Musicality: Exploring the Basis of Human* の出版以降、日本語の論文¹⁰⁾ や書籍¹¹⁾ をとおして、心理学や音楽教育の分野にコミュニケーション・ミュージカルティを紹介していた。各々がコミュニケーション・ミュージカルティの意義を見出していたなか、2015年3月に行われた日本発達心理学会でのラウンドテーブル¹²⁾ でかれらが議論を交わしたことから交流が生じ、根ヶ山とトレヴァーセンとの間の長年の研究交流¹³⁾ も基盤に、*Communicative Musicality: Exploring the Basis of Human Companionship* の邦訳本である『絆の音楽性—つながりの基盤を求めて—』が出版された。邦訳本の出版を契機に、その後も、かれらの活動は国内で広がりを見せた。例えば、「コミュニケーション・ミュージカルティ」概念を基盤とした論文の執筆¹⁴⁾、マロックとトレヴァーセンにもとづきつつも、日本の研究者の手によってコミュニケーション・ミュージカルティに関連する最新の研究成果を反映させた成果をまとめた『わたしたちに音楽がある理由—音楽性の学際的探究—』の出版など、同概念をわが国に紹介するのみならず、わが国からもコミュニケーション・ミュージカルティの系譜に位置づく新たな研究を提案している。

一方、1970年代以降に起こった世界的な心理学研究の興隆のなかで、研究が国際化され、海外の研究を受容する基盤が形成されていたわが国の音楽心理学分野では、ハーグリーブズによるアイデアは比較的早い段階から受容されていた。わが国で4冊が邦訳されているハーグリーブズの著作のうち、『音楽の発達心理学』と『音楽の社会心理学—人はなぜ音楽を聴くのか—』は音楽心理学の新しい体系に関するものである。それぞれの出版に至るまでの経緯は異なるものの、これらの著作が邦訳され、国内でも手に取ることができる状況にあることに鑑みれば、わが国でも音楽発達心理学や音楽の社会心理学に関するアイデアが一定程度受容されているといえるだろう。また、ほかにも彼の代表的なシリーズ著作である *Musical Identities* (1冊目)、*Musical Communication* (2冊目)、*Musical Imaginations: Multidisciplinary Perspectives on Creativity, Performance and Perception* (3冊目) のうち、1冊目と2冊目は、既に邦訳されている¹⁵⁾。

6 音楽とコミュニケーションに関する研究のこれから

本稿では、音楽を人間のコミュニケーションのひとつのかたちとしてとらえる認識に立つ研究が盛んになされている英国に焦点を当て、その発展に寄与した研究者であるトレヴァーセンとマロック、ハーグリーブズによる研究の概要と、それらがわが国でどのように受容されてきたかをまとめた。

トレヴァーセンとマロックによるコミュニケーション・ミュージカルティの意義に着目すると、過去の研究とは異なる点が大きく2つ存在する。まずひとつは、「音楽」として解釈されるものが拡大されたことである。マロックとトレヴァーセンは、コミュニケーション・ミュージカルティを論ずる際に用いられる「音楽的」や「音楽性」という語について、「有名作曲家や演奏家によるいわゆる音楽について語っているのではなく、特別な意味で用いている」と述べている (Malloch & Trevarthen 2009, p.4)。つまり、このアイデアでは、ブラッキングの指摘にもあった西洋音楽的な「音楽」とどまらず、もっと多義的な意味で音楽をとらえることを可能としている点が、特徴のひとつである。そしていまひとつは、コミュニケーションに内在される音楽性を見とるための理論を醸成した点である。マロックが、コミュニケーション・ミュージカルティを理論として整理したことによって、音響分析を行い、「パルス」、「クオリティ」、「ナラティブ」の特徴を明らかにすることができれば、対象がどのようなヒトであれ、その音楽性を見とることが可能となった。「音楽性」という曖昧なものをとらえるための、大きな手段を得られたことは、他の研究とは大きく異なる点であるといえよう。

これらの新しきをもとに、わが国でも受容が進んでいるコミュニカティヴ・ミュージカルティだが、一方で以前から課題も指摘されている。2015年に開催された、日本音楽教育学会第46回大会のパネルディスカッション「それって音楽性？一人・音・環境の動的関係性を調律する musicality は資質を支える概念か」にて、指定討論者の小川容子は、提案者らが様々な方法で見とった音楽性の報告を『『動的な、コミュニケーション的な』諸現象』としてまとめ、音楽性を単なる現象として捉えることの口惜しさを述べた。そのうえで、「音楽性の出現の濃淡や頻度、あるいは増減や生成を具体的に理論化すること」の必要性や、理論化のために考えられる、①構成要素の探究、②産出課程の明確化、③適応・形成・調整を含めた形成過程のモデル化、の3つのアプローチを提案している(小川 2015)。しかし、現時点でも音楽性に関して、小川の指摘に応答し得るような理論は提唱されていない。

コミュニカティヴ・ミュージカルティの抱えるこのような課題が解消されないことで、音楽を人間のコミュニケーションのひとつのかたちとしてとらえる認識に立つ研究のうち、最も発展に困難が生じるのが、質的な研究である。質的な研究は、利用できる既知の研究的知見がなく、観察やインタビューをしてそのデータを分析する必要があるものに適した方法(論)である(大谷 2017)。特に、社会的・文化的な背景によってあり方が異なる「コミュニケーション」や「音楽」のように、共通の定義がなされていないものを対象に研究する場合には、量的な研究と併せて質的な研究がなされると、対象が「どうなっているか」、それらを改善よりよくするためには「どうすればいいか」、という記述的知見と処方的知見を得ることができ(大谷 2019, pp.92-97)、当該分野の研究が多方面から深まることにつながる。しかし、質的な研究も現在、了解性と説得性を高めるために分析的枠組みとしての概念的・理論的枠組みが求められる潮流にあること(大谷 2019, pp.166-168)に鑑みると、質的な研究の分析的枠組みとして機能し得る理論なしに、コミュニケーションと音楽を見とることは不可能である。

今度は、ハーグリーブズらに着目してみると、現実の問題への適用を見据えた彼の研究成果のなかには、いくつか質的研究の分析的枠組みにも援用できそうな理論やモデルが見られる。例えば、第4節でも紹介した「音楽的コミュニケーションの相互作用フィードバックモデル」は、社会的・文化的背景を考慮した演奏と反応のモデルである。「コミュニケーション」や「音楽」のように、曖昧になりがちな研究対象をどのようにとらえるか。一種、そのヒントとなるモデルであろう。また、彼による「音楽的コミュニケーション」のアイデアをふまえて執筆された、スウェーデンのウプサラ大学の教授、パトリック・ジュスリン(Patrik Juslin)の論考(Juslin 2007)も非常に示唆的である。音楽的コミュニケーションの概念を「情動」という観点から整理した論考のなかでは、「音楽的事象は、どのようにして聴取者に情動を引き起こすのか」という問いを明らかにするためのヒントとして、理論的メカニズム(音楽的期待、気分の伝染、覚醒力、連想、心的イメージ)が整理されている。

量的な音響分析によって導かれる、パルスやクオリティ、ナラティブなどの音響的特徴が理論の実証に不可欠なコミュニカティヴ・ミュージカルティとは異なり、モデルによってそれぞれのアイデアが整理され、現実の音楽的な事象に落とし込むことが容易なハーグリーブズらの研究の成果は、質的な研究にも援用可能という点で意義深い。しかしこれらは、諸概念の理論化に向けたモデルを示したものに過ぎない。つまり、「音楽性」そのものや、音楽的事象がヒトに与える影響などの具体を理論化することには、ハーグリーブズらの研究でも至れていないのである。

わが国における、コミュニケーションと音楽に関する研究の発展を見越した場合に、トレヴァーセンとマロックのコミュニカティヴ・ミュージカルティによって抱える、質的研究の不足という課題を乗り越えるためには、ハーグリーブズらによって提示されている諸モデルを援用して、質的な研究を重ねることが有用である。しかし一方で、ハーグリーブズらの研究によって提案されたモデルを越えるには、質的な研究の成果を基盤として、量的な研究による理論の実証がなされる必要があるのではないだろうか。今後、わが国でコミュニケーションと音楽に関する研究を発展させるためには、トレヴァーセンとマロックのみにとどまらず、ハーグリーブズらなどによる知見も参照し、量的・質的な研究をそれぞれ往還することが重要となるだろう。

これまでにまとめた研究の知見を取り入れることで、わが国の音楽教育研究がさらに発展することに期待したい。

註

- 1) 例えば、ブラッキングは、米国の心理学者であるカール・シーショア (Carl Seashore 1866-1949) による著書 *Measures of Musical Talents* のテストを、文化のなかで発達する感覚弁別力を測るものであり、西洋音楽的な文化の音楽システムと類似していなければ、妥当性をもたないものであるとして、批判している (Blacking 1979, pp.5-6)。
- 2) Hargreaves (1986b) などにおいて、音楽発達心理学と音楽教育とのつながりを強調している。
- 3) ハーグリーブズは、英国における音楽教育が初等教育と中等教育の移行期に抱える課題に対する教師のアプローチを分析した Marshall & Hargreaves (2008) など、自身が音楽教育のフィールドで行った研究を公表している。
- 4) Malloch & Trevarthen (2009, p.xv) やエディンバラ大学のホームページ (<https://www.ed.ac.uk/ppls/psychology/people/academic-staff>) (2023年1月8日最終閲覧)などを参照した。
- 5) 「パルス」とは、「音声にせよ身振りにせよ時間の中で行動事象1つ1つが整然と継起すること」であり、コミュニケーションのなかで、何がいつ起こるのか、の予測を可能とするものである。また、「クオリティ」とは、時間にもなって動く表現が、音質、音高、強度など、心理音響学的な属性をもったものである。そして、これらが組み合わされて生じるものが、表現と意図の「ナラティブ」である (Malloch & Trevarthen 2009, p.4)。
- 6) 例えば、Malloch & Trevarthen (2000) などがある。
- 7) 例えば、Malloch et al. (2012) などがある。
- 8) Hargreaves & Lamont (2017) の著者紹介欄や、ローハンプトン大学の Research Explorer (<https://pure.roehampton.ac.uk/portal/en/persons/david-hargreaves>) (2023年1月8日最終閲覧)などを参照した。
- 9) 例えば、交互発話時に発話長と発話間隔にどのような時間的階層性が存在するかを明らかにした、三宅ほか (2004) では、Malloch (1999) と Trevarthen (1999) が引用されている。
- 10) 例えば、石島・根ヶ山 (2013) や、今川 (2014) などがある。
- 11) 例えば、日本赤ちゃん学会の監修した『乳幼児の音楽表現—赤ちゃんから始まる音環境の創造』のなかで、今川恭子は、Malloch & Trevarthen (2009) を二度引用している (今川 2016a, p.22/今川 2016b, p.79)。
- 12) 今川 (2018) より、日本発達心理学会第26回大会で開催されたラウンドテーブル「音楽性を『育む環境』を捉えなおす—乳児期に何が育ち、何を育むのか—」(日本発達心理学会第26回大会 HP (https://confit.atlas.jp/guide/event/jsdp2015/subject/RT6_2/category?cryptoId=), 2023年1月8日最終閲覧)での議論を指すと思われる。
- 13) 邦訳本の出版に際して、根ヶ山 (2018) では、「私がこうして訳者代表としてこの文章を書いているのは、編者のお一人であるトレヴァーセン教授と私の長年にわたる交流があつてのことである」(p.vi)と述べられている。
- 14) 例えば、今川ほか (2018) や、今川ほか (2019) などがある。
- 15) マクドナルドほか (2011) と、ミールほか (2012) が出版されている。

引用・参考文献

- Blacking, J. (1969). The value of music in human experience. *The yearbook of the international folk music council*. (Republished in P. Bohlman, & B. Nettl (Eds.) (1995). *Music, culture and experience: Selected papers of John Blacking*. Chapter one: Expressing human experience through music.) University of Chicago Press.
- Blacking, J. (1979). *How musical is man?* Faber. (徳丸吉彦 (訳) (1978) 『人間の音楽性』岩波書店.)
- Blacking, J. (1988). Dance and music in Venda children's cognitive development. In G. Jahoda, & I. M. Lewis (Eds.), *Acquiring culture: Cross cultural studies in child development* (pp.91-112). Beckenham.
- Farnsworth, P. R. (1958). *The social psychology of music*. Dryden Press. (Republished in 1969. *The social psychology of music*. Iowa State University Press.)
- Hargreaves, D. J. (1986a). *The developmental psychology of music*. Cambridge University Press.

- Hargreaves, D. J. (1986b). Developmental Psychology and Music Education. *Psychology of Music*, 14(2), 83-96.
- Hargreaves, D. J., & North, A.C. (Eds.) (1997). *The social psychology of music*. Oxford University Press.
- Hargreaves, D., MacDonald, R., & Miell, D. (2007). How do people communicate using music? In D. Miell, R. MacDonald, & D. Hargreaves (Eds.), *Musical communication* (pp.1-25). Oxford University Press.
- Hargreaves, D. J., Miell, D., & MacDonald, R. (Eds.) (2011). *Musical imaginations: Multidisciplinary perspectives on creativity, performance and perception*. Oxford University Press.
- Hargreaves, D. J., & Lamont, A. (2017). *The psychology of musical development*. Cambridge University Press.
- Juslin, P. N. (2007). From mimesis to catharsis: Expression, perception, and induction of emotion in music. In D. Miell, R. MacDonald, & D. Hargreaves (Eds.), *Musical communication* (pp.85-115). Oxford University Press.
- MacDonald, R., Hargreaves, D., & Miell, D. (Eds.) (2002). *Musical identities*. Oxford University Press.
- Malloch, S., Sharp, D., Campbell, D. M., Campbell, A. M., & Trevarthen, C. (1997). Measuring the human voice: Analysing pitch, timing, loudness and voice quality in mother/infant communication. *Proceedings of the Institute of Acoustics*, 19(5), 495-500.
- Malloch, S. (1999). Mothers and infants and communicative musicality. *Musicae Scientiae*, 3(1), 29-57.
- Malloch, S., & Trevarthen, C. (2000). The dance of wellbeing: Defining the musical therapeutic effect. *Nordic Journal of Music Therapy*, 9(2), 3-17.
- Malloch, S., & Trevarthen, C. (Eds.) (2009). *Communicative musicality: Exploring the basis of human companionship*. Oxford University Press.
- Malloch, S., Shoemark, H., Črnčec, R., Newnham, C., Paul, C., Prior, M., & Burnham, D. (2012). Music therapy with hospitalized infants: The art and science of communicative musicality. *Infant Mental Health Journal*, 33(4), 386-399.
- Marshall, N. A., & Hargreaves, D. J. (2008). Teachers' views of the primary-secondary transition in music education in England. *Music Education Research*, 10(1), 63-74.
- Miell, D., MacDonald, R., & Hargreaves, D. (Eds.) (2007). *Musical communication*. Oxford University Press.
- Trevarthen, C. (1984). How control of movements develops. In H. T. A. Whiting (Ed.), *Human motor actions: Bernstein reassessed* (pp.223-261). Elsevier Science.
- Trevarthen, C. (1999). Musicality and the intrinsic motive pulse: Evidence from human psychology and infant communication. *Musica Scientiae*, Special Issue 1999-2000, 155-211.
- Trevarthen, C. (2002). Origins of musical identity: Evidence from infancy for musical social awareness. In R. MacDonald, D. Hargreaves, & D. Miell (Eds.), *Musical identities* (pp.21-38). Oxford University Press.

- 石島このみ・根ヶ山光一 (2013) 「乳児と母親のくすぐり遊びにおける相互作用—文脈の共有を通じた意図の読みとり—」『発達心理学研究』第 24 巻第 3 号, pp.326-336.
- 今川恭子・市川恵・小佐川心子・伊原小百合・志村洋子 (2018) 「乳児と養育者の音声相互作用にみる音楽性—音響分析を通して見るその特徴と発達—」『聖心女子大学論叢』第 131 巻, pp.128-114.
- 今川恭子 (2014) 「幼児と音楽をめぐる質的研究の現在」『音楽教育学』第 44 巻第 1 号, pp.32-39.
- 今川恭子 (2016a) 「音楽環境としての『手遊び・指遊び』」日本赤ちゃん学会 (監修) 『乳幼児の音楽表現—赤ちゃんから始まる音環境の創造』中央法規出版, p.22.
- 今川恭子 (2016b) 「赤ちゃんにとっての音楽に必要な視点」日本赤ちゃん学会 (監修) 『乳幼児の音楽表現—赤ちゃんから始まる音環境の創造』中央法規出版, p.79.
- 今川恭子 (2018) 「訳者あとがき」S. マロック, C.トレヴァーセン (著) 根ヶ山光一・今川恭子ほか (監訳) 『絆の音楽性—つながりの基盤を求めて—』音楽之友社, p.615.
- 今川恭子・関義正・香田啓貴・藤井進也 (2019) 「人間の音楽性の由来と発達—鳴禽類, 霊長類, 乳児をめぐる学際的探究と音楽教育—」『聖心女子大学論叢』第 133 号, pp.171-192.
- 今川恭子 (編著) (2020) 『わたしたちに音楽がある理由—音楽性の学際的探究—』音楽之友社.
- 大谷尚 (2017) 「質的研究とは何か」『YAKUGAKU ZASSHI (薬学雑誌)』第 137 巻第 6 号, p.654.
- 大谷尚 (2019) 『質的研究の考え方—研究方法論から SCAT による分析まで—』名古屋大学出版会.

- 小川容子 (2015) 「指定討論者から」『音楽教育学』第45巻第2号, p.83.
- 根ヶ山光一 (2018) 「訳者まえがき」, S. マロック, C. トレヴァーセン (著) 根ヶ山光一・今川恭子ほか (監訳) 『絆の音楽性—つながりの基盤を求めて—』音楽之友社, p.vi.
- ハーグリーヴズ, D.J. (著) 小林芳郎 (訳) (1993) 『音楽の発達心理学』田研出版.
- ハーグリーヴズ, D.J., ノース, A.C. (著) 磯部二郎・沖野成紀・小柴はるみ・佐藤典子・福田達夫 (訳) (2004) 『音楽の社会心理学—人はなぜ音楽を聴くのか—』東海大学出版会.
- マクドナルド, R., ハーグリーヴズ, D.J., ミエル, D. (編著) 岡本美代子・東村知子 (共訳) (2011) 『音楽アイデンティティ—音楽心理学の新しいアプローチ—』北大路書房.
- マロック, S., トレヴァーセン, C. (著) 根ヶ山光一・今川恭子ほか (監訳) (2018) 『絆の音楽性—つながりの基盤を求めて—』音楽之友社.
- ミール, D., マクドナルド, R., ハーグリーヴズ, D.J. (編著) 星野悦子 (監訳) (2012) 『音楽的コミュニケーション—心理・教育・文化・脳と臨床からのアプローチ—』誠信書房.
- 三宅美博・辰巳勇臣・杉原史郎 (2004) 「交互発話における発話長と発話間隔の時間的階層性」『計測自動制御学会論文集』第40巻第6号, pp.670-678.